

中島敦「山月記」の研究

——原典「人虎伝」との比較を中心に——

G13111 陸 薇

中島敦（明治四十二年五月～昭和十七年十二月）は東大国文科をへて教職につき、かわらら英文学、中国文学を研究した。父祖伝来の漢学の教養にその広い読書から得た独自の近代的憂愁を加味して、知識人の宿命、孤独を表現した作家で、彼の出現は戦時の空白時代の文壇の思いがけぬ収穫として多くの批評家や作家の賞讃を博した。だが、中島敦は喘息のために急逝したことは今日もお惜しまれている。中島敦の代表作は「山月記」、「李陵」、「弟子」、「光と風と夢」などである。この中の短編小説「山月記」は昭和十七年二月『文学界』に、短編「文字禍」とともに『古譚』という総題の下に載る。同年七月、筑摩書房刊『光と風と夢』に収録され、中島敦のデビューを告げる作品となった。前記二編のほか「狐憑」「木乃伊」をあわせ全四編で『古譚』を形成する。戦後、「山月記」は釘本久春、西尾実によって高等学校の国語教科書に初めて収録され、今ではほとんど全種の教科書に必ずというほど採用されているし、各種の文庫にも、現代文学の領域を持ったものはほとんど入っている。

「山月記」は中島敦が中国唐代小説「人虎伝」によって、翻案したものである。中国で「人虎伝」のような人間が動物に変身する物語が少なくないが、「人虎伝」は変身物語の中では無名な小説である。なぜ中国で無名な小説が日本に翻案させて有名になるか、また、中島敦はどうやって「山月記」を創作したのかという疑問を持ったことをきっかけに、中島敦の「山月記」を研究することにした。本稿では唐代の李景亮の「人虎伝」と中島敦の「山月記」の原文を比較しつつ、中島敦の創作方法や特徴を取り上げ、考察していきたい。第一章では中島敦自身の姿が投影された李徴は「山月記」と「人虎伝」のそれぞれの冒頭部分と李徴と袁傜の出会いの描写を比較して、中島敦はどうやって自分自身が李徴に投影したのかを明らかにしたい。第二章では詩に執着する李徴を「山月記」と「人虎伝」の李徴が虎に変身する経過を告白する場面と李徴が袁傜に詩を託す場面を比較して、詩に執着する李徴像を取り上げたい。第三章では「山月記」と「人虎伝」の李徴が虎になった理由を告白する場面と李徴が袁傜に妻子のことを託す場面、及び、最後の二人の別れの場面を比較して、虎になった李徴の孤独や悲劇性を明らかにしたい。

「山月記」を発表して以来、多くの論者によって評価され、「山月記」に関する先行研究の数は膨大である。

「山月記」について佐々木充氏は次のように述べている。

「山月記」が真に生きているのは、このような世界である。ここでは、すでに、「臆病な自尊心・尊大な羞恥心」というものの働く余地は極く狭く限定されている。伝統

的「自我」論は、この短編の小部分を照し出すだけである。この時「変身」という古典的モメントが、「人虎伝」におけるたんなる奇異性としてではなく、「無限」に近づこうとする人間執念の形象としてあることがあきらかになるであろう。李徴の悲劇は彼一人の上のことではありえない。人間が「生きる」とは、つねに「無限」にいきつづけることへの願望そのものであり、それは、原始人の生への慄きに始まり人間とも存在しつづけるものであろうからである。<sup>注一</sup>

山本周子氏は「山月記」と「人虎伝」の比較及び「山月記」の中の李徴の告白部分を中心に考察することによって次のように述べている。

中島は「存在の不安」に対して文学を、つまりは作家的自我を確立することによって乗り越えようという姿勢を、ここでは前面に押し出してはいないといえよう。しかし、これまでに見てきた如く、中島の投影である李徴の内面を探っていくと、この姿勢は「狼疾記」「かめれおん日記」二篇より明らかに一歩、前にふみ出されている。“作家的自我”ということについては、それを貫き通した人物、ツシタラⅡ物語作家の名を与えられたステイブンスを描き、自らの生と照らし合わせることが既に試みられていたと思われる。彼はステイブンス的な生を己れの側にたぐり寄せて自らのそれを比べてみた時、自らに足りないものを痛感したのであろう。そしてこの不足が何であるのかを「山月記」において数回にわたる自己否定を行う李徴を通して確認を得ようとした。その内面のドラマが「山月記」という作品に定着したと言えよう。<sup>注二</sup>

また、藤村猛氏は「山月記」における原典改変や告白内部の食い違いを考えると、中島は自分の弱さのみならず作家への執念をも、李徴に増幅して投影したと考えて良かろうとものべている。<sup>注三</sup>

平林文雄氏はその素材の枠はそのまま借用しながらも、中島敦はそれを自分自身のものとなしきつて、その中に詩人存在の運命の悲しさ、芸術に囚われたものの狂気という、今まで描かれるべくして描かれ得なかつた芸術家自身による芸術家の心情の告白という芸術上の大きな課題が、渾然たる作品に結晶し、見事に解明されていると述べている。<sup>注四</sup>

以上、膨大な先行研究の中から、論考を挙げ、「人虎伝」との比較や、中島敦の執念などの視点から様々な見解を示しているが、本稿では、これらの先行研究を踏まえながら、自分なりに考察し、「山月記」の特質を明らかにしたいと考えている。

なお、テキストは『中島敦全集 第一巻』筑摩書房（昭和二十四年十一月）によったが、引用は旧漢字を新漢字に改めた。

品論集十』収録) クレス出版 二〇〇一年十月二十五日

注二 山本周子 中島敦「山月記」考 二松学舎大学人文論叢(二十九) 二松学舎大学

人文学会 一九八四年

注三 藤村猛 『中島敦研究』 溪水社 平成十年十二月

注四 平林文雄 『中島敦 注釈鑑賞研究』 和泉書院 二〇〇三年三月

## 第一章人物の設定と出会い

### 第一節 冒頭部分の設定と意味

中島敦の短編小説「山月記」は唐代李景亮撰「人虎伝」を典拠としたすぐれた作品である。「山月記」と「人虎伝」を比較する場合、「人虎伝」の諸本のいずれを見るべきであろうか。氷上英広氏は次のように述べている。

「光と風と夢」と頂戴した。いま家中で読んでみる。(字がむづかしさうだ) 山月記は漢文大成の「晋唐小説」にあるものだらう。いつか僕も、小説になほそうと思つて二三枚書いたことがあり、不思議な気がした。<sup>注一</sup>

氷上英広氏が指摘している「漢文大成の「晋唐小説」は大正九年十二月に発行された『国訳漢文大成』文学部第十二巻である。中島敦の「山月記」は昭和十七年二月『文学界』に掲載された。それによつて、中島敦は『国訳漢文大成』の「晋唐小説」の「人虎伝」を基にして、「山月記」を創作したと考<sup>注二</sup>えられている。したがつて、この見解に基づいて、本稿では『国訳漢文大成』所収の「人虎伝」と「山月記」を比較し、以下に「山月記」と「人虎伝」の表現に即して具体的に検証していきたい。

さて、それぞれの作品の冒頭部は次のようになってい

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交りを絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃から其の容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊類の美少年の俤は、何処に求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遥か高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷けたかは、想像に難くない。彼は快々として樂まず、狂悖の性は愈々抑え難がたくなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを

知る者は、誰もなかった。

「山月記」

隴西の李徴は皇族の子にして、號略に家す。徴少くして博学、善く文を属す。弱冠州府貢に従ふ。時に名士と號す。天宝十五載春、尚書右丞陽元の榜下に於て進士に登第す。後数年、調せられて江南尉に補す。徴性疎逸、才を恃んで倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず。嘗に鬱鬱として樂まず。同舎の會既に酣なる毎に顧みて其群官に謂つて曰く、生は乃ち君等と伍を爲さんやと。其僚友咸な之に側目す。謝秩に及び則ち退き歸りて間適し、人と通ぜざること歳餘に近し。後衣食に迫られ乃ち東吳楚の間に遊び、以て郡國の長吏に干む。楚人其聲を聞くこと固より久し。至るに及び皆館を開いて以て俟つ。宴遊歡を極めて將に去らんとすれば、悉く厚く遣りて以て其囊橐を實す。徴吳楚に在り且に歳餘にならんとす。獲る所の饋遺甚だ多し。西號略に歸り未だ舍に至らず。汝墳の逆旅の中に於て忽ち疾を被りて發狂し、僕者を鞭捶つ。其苦に勝へず。是に於て旬餘疾益甚し。何もなく夜狂走し其の適く所を知らず。家僮其の去を跡ねて之を伺ふ。月を盡して徴竟に回らず。是に於て僕者其乘馬を驅り其囊橐を挈へて遠く遁れ去る。

「人虎伝」

まず、主人公の名前はいずれも「隴西の李徴」である。ついで、「人虎伝」は「徴少くして博学、善く文を属す」と表現している。一方、「山月記」は彼を「博秀才穎」と設定している。多少用いられている言葉に違いはあるものの、「山月記」は基本的には「人虎伝」を踏襲したものと考えてよいだろう。

ところで、「人虎伝」では「隴西の李徴」の直後に「皇族の子にして」との設定があるにもかかわらず、「山月記」ではこれを省略している。「人虎伝」がことさらにそのように設定しているのは、富裕な皇族にとつては貧乏な庶民より勉強する環境を作りやすかつただろう。すなわち、皇族は生活に困らず、勉強に専念できるし、進士科に合格するのも庶民よりも有利だったからだと言えるだろう。中島敦は李徴を「皇族の子」としてではなく、庶民に設定したのは、李徴が進士科に合格する困難さと李徴のすぐれた才能を強調していると考えられる。

これに続いて、「人虎伝」では「天宝十五載春」とされている。一方、「山月記」は「天宝の末年」と物語の時間を設定するから、ほぼ原文の通りであろう。天宝十五年は、中国・唐の玄宗の治世にあたり、西暦では七五六年である。

続いて、「人虎伝」では「尚書右丞陽元の榜下に於て進士に登第す」としている。「山月記」

では李徴を「若くして名を虎榜に連ね」と設定する。「人虎伝」に比べて「山月記」ははるかに簡略になっているが、それは当時の日本の読者たちにとっては、「尚書右丞楊元の榜下」といった情報は、意味を成さなかったからであろう。また、同時に表現を簡略にするといった意図もあったものと思われる。

続いて、「山月記」は「ついで江南尉に補せられた」とし、「人虎伝」は「後数年、調せられて江南尉に補す」とする。これもほぼ原典を踏襲したものと見てよい。

ところが、李徴の性格を表す次の表現「性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く」とする「山月記」に対して、「人虎伝」は「徴性疎逸、才を恃んで倨傲なり」としている。ここで、注目すべきは「狷介」という言葉である。

「狷介」を『日本国語大辞典』では以下のように説明している。

「狷」は意を曲げないこと。「介」はかたいこと。自分の意志をかたく守って、他と妥協しないこと。人と相いれないこと。また、その狷介の性知らず識らず此過失を犯すは亦止むを得ざるなり。<sup>注三</sup>

また、『大漢和辞典』では、「狷介」を次のように説明する。

自ら守る所が堅くて他と和合しない、片意地で他人と和同しない。<sup>注四</sup>

そして、「人虎伝」の中の言葉「疎逸」、「倨傲」をそれぞれ『日本国語大辞典』では次のように述べている。

「疎逸」―荒々しく脱俗的なこと。また、そのさま。<sup>注五</sup>

「倨傲」―おごりたかぶること。また、そのさま。傲慢。<sup>注六</sup> 驕傲。

また、『大漢和辞典』では、「倨傲」を次のように説明する。

「倨傲」―かたぶりあなどる。倨驚。倨敖。<sup>注七</sup> 倨傲。

この二つの辞書によると、「倨傲」はおごりたかぶること、傲慢なことであり、そこには明らかにマイナスのイメージが含まれている。それに対して、「狷介」は自分の意志をかたく守って、他と妥協しないことであり、そこにはマイナスの意味は入っていない。すなわち、「山月記」における李徴の表現は原文よりも李徴に対して、より肯定的に描いているということが出来るだろう。

続いて、「人虎伝」は「跡を卑僚に屈する能はず」とし、「山月記」は「賤吏に甘んずるを潔しとしなかった」とする。多少用いられている言葉に違いはあるものの、ここも基本的には「人虎伝」を踏襲したものと考えてよいだろう。

ところが、「人虎伝」に「嘗に鬱鬱として樂まず。同舎の會既に酣なる毎に顧みて其群官に謂って曰く、生は乃ち君等と伍を爲さんと。其僚友咸な之に側目す。」といった表現を用いて、「皇族の子」である李徴の傲慢さと同僚との関係の悪さを生々しく描いている。と

ところが、「山月記」ではこれを全面的に省略している。「山月記」の方はより簡潔な表現で「詩作に耽った」李徴を造型しているのである。

続いて、「人虎伝」は「謝秩に及び則ち退き歸りて間適し、人と通ぜざること歳餘に近し」とし、「山月記」は「いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交りを絶つて」とする。『大漢和辞典』では「謝秩」を次のように説明する。

任期を満ちて退くこと。<sup>注八</sup>

「山月記」の方は李徴が自分で官をやめるといったニュアンスがあるが、「人虎伝」の方は李徴が任期を終えてから、職場から身を引いたと読める。多少ニュアンスに違いはあるものの、ここはほぼ原典を踏襲したものと見てよいが、「山月記」の方の李徴は「性、狷介、自ら待むところ頗る厚く」性格を持ったために、官職でうまく出世できなかった。そして、自分で官をやめ、「詩作」に没頭し、詩人として世の中に名を揚げ、詩家として出世できるのが望ましいと考えていたということになる。

ところが、「山月記」では李徴が官を退いた後、「ひたすら詩作に耽った。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。」と設定している。一方の「人虎伝」にはこの設定がない。すなわち、この部分は中島敦が創作した部分である。官職でうまく出世できなかった李徴を「詩作」に耽って、「詩家」として名を残そうとする存在として設定し、中島敦は名譽に執着する李徴を造型した。また、「詩作」は芸術の一つである。ここで、中島敦は自分の芸術への執着心を李徴に投影したとも言えるだろう。

続いて、「山月記」では「しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃から其の容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊類の美少年の倂は、何処に求めようもない。」とする。この部分も「人虎伝」にはない。つまり、ここは中島敦が創作した部分である。李徴が「進士に登第した頃の豊類の美少年」から詩作に耽った時「容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として」といった外貌の変化から見ると、李徴が生活に苦しんでいたのは明らかである。さらにはそのことに加えて、李徴が精神的にも苦しんでいたと考えられる。当時、病気に苦しんでいた中島敦は李徴と同じ様に作家として名を成すことを望んでいたので、精神的に苦しんでいた中島敦は自分自身を李徴に投影したと考えられる。

続いて、「人虎伝」では「後衣食に迫られ乃ち東吳楚の間に遊び、以て郡國の長吏に干む。」として、「山月記」では「数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。」とする。ここで、李徴が妻子のた

めにまた官職に戻るということからみると、李徴が芸術の道に邁進することができずに中途半端なものになってしまったと言ってもいいだろう。李徴は現実と芸術の両立ができたため、官職も芸術も中途半端になってしまった。そのため、官職で出世できないにもかかわらず、また詩人として名をなすこともできなかったのである。李徴の本当の望みは詩人として名をなすことであった。ところが、それも叶わなかった。また、詩人であることに徹するためには生活のすべてを投げ捨てなければならなかったが、彼は「妻子の衣食」のためにそれもできなかったのである。芸術家であるためには妻子を省みてはならなかったのである。「山月記」の方は「妻子」のことを加えて、「吳楚」という地名を省略している。「吳楚」という地名は当時の日本の読者たちにとっては、特別な意味を持たなかったからであろう。中島敦は先に「妻子」のことを読者に提示しているが、この後に、李徴が哀慘に妻子のことを託すのを読者に受け入れやすくするためであろう。だから、多少用いられている言葉に違いはあるものの、ここも基本的には「人虎伝」を踏襲したものと考えてよいだろう。

ところが、「人虎伝」では「楚人其聲を聞くこと固より久し。至るに及び皆館を開いて以て俟つ。宴遊歡を極めて將に去らんとすれば、悉く厚く遣りて以て其囊橐を實す。徴吳楚に在り且に歳餘にならんとす。獲る所の饋遺甚だ多し。」としているが、「山月記」では再び官職に戻った時の李徴が「一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷けたかは、想像に難くない。彼は快々として樂しまず、狂悖の性は愈々抑え難がたくなつた。」と設定されている。

「人虎伝」では、李徴が楚人に歓迎され、吳楚にいる一年余りの間、多くの贈り物をもらった。一方、「人虎伝」と比べてみると、「山月記」の李徴の設定は全く違っている。ここには、作家としての名を揚げることを望んでいたが、結局できなかった李徴が官職に戻って、かつて鈍物として齒牙にもかけなかった同輩が既に遙か高位に進み、自分がその連中の下命を拝さねばならぬという屈辱感を生じたことが想像できるだろう。その時の李徴が官吏としても詩人としても、自分の中途半端な行動のせいで出世できなかったという挫折感に苦しんでいただろう。木村一信氏はこの部分で「李徴が二つの挫折を味わっている」と指摘している。<sup>注九</sup>この「二つの挫折」とは、一つ目は官吏としての挫折、二つ目は詩人としての名を成すことなく、再び官職での挫折したことであると考えられる。自分の才能が他人よりすぐれていると信じているのに、出世コースから外れる李徴の官吏としての挫折は明らかである。詩人としての文名があがらず、自己の才能にも絶望した李徴は、生活のためもあって、再び、官吏の道を選んだ。さらに、その官吏としての生活も、「鈍物として

の歯牙にもかけなかった其の連中の下命を拝さねばならぬ」ことが、彼の自尊心を傷つけ、「狂悖の性」を募らせ、ついには発狂したというふうには膨らませていくことで、詩人としての李徴の挫折像が明瞭にうち出されている。

続いて、「人虎伝」では「西號略に歸り未だ舎に至らず。汝墳の逆旅の中に於て忽ち疾を被りて發狂し」とし、「山月記」では「二年の後、公用で旅の途中に出、汝水のほとりに宿った時、遂に發狂した。」としている。「山月記」の方は李徴が公用の旅で發狂したが、「人虎伝」の方は號略へ帰ろうとする途中で發狂したのである。また、「山月記」の方は「一年の後」と時間を設定しているが、「人虎伝」にはこうした時間の設定がなかった。ここで、中島敦は前文を結んで、李徴がこの一年に官職で自尊心を傷つけられ、現状に対してどんな不満でたまらなかつたとしている。「山月記」は基本的には「人虎伝」を踏襲しているが、中島敦は李徴が發狂した原因は自尊心が傷つくことであつたことを強調していると考えられる。

ところが、李徴が發狂した時の描写について、「山月記」では「或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駆出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかつた。」とし、「人虎伝」では「僕者を鞭捶つ。其苦に勝へず。是に於て旬餘疾益甚し。何もなく夜狂走し其の適く所を知らず。家僅其の去を跡ねて之を伺ふ。月を盡して徴竟に回らず。是に於て僕者其乗馬を驅り其囊橐を挈へて遠く遁れ去る。」としている。両方を比べてみると、中島敦は「僕者を鞭捶つ。其苦に勝へず。」と「是に於て僕者其乗馬を驅り其囊橐を挈へて遠く遁れ去る。」を省略していることがわかる。ここで、「僕者」は作品の主人公と作品の主旨との関わりはあまりない。つまり、「僕者」という人物が作品の中になくても主旨が変わらないので、中島敦は「僕者」のことを省略し、より簡潔な言葉で表現するといった意図があつたものと思われる。

以上、それぞれ冒頭部分の比較から見ると、「山月記」はほぼ「人虎伝」を踏襲したものであるが、中島敦は自分の創作を文中に書き加えて、詩作に耽つた李徴を造型し、作者として名を成すことを望んでいた中島敦は自身の姿を李徴に投影したと考えられる。また、官吏としても、詩人としても挫折を受けた李徴が自尊心が傷つくことを詳しく書き加えることで、読者が李徴が遂に發狂に至ることを容易に受け入れる素地としたのである。

## 第二節 出会いの描写の違いに見る中島敦の創作

続いて、「山月記」と「人虎伝」の李徴と袁慘の出会いについての描写を比較してみよう。それぞれの原文は次のようになっていいる。

翌年、監察御史、陳郡の袁慆という者、勅命を奉じて嶺南に使し、途に商於の地に宿った。次の朝未だ暗い中に出發しようとしたところ、馱吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁慆は、しかし、供廻の多勢なのを待み、馱吏の言葉を斥けて、出發した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁慆に躍りかかるかと見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で「あぶないところだった」と繰返し呟くのが聞えた。その声に袁慆は聞き覚えがあった。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思いあたって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁慆は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かった李徴にとつては、最も親しい友であった。温和な袁慆の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう

叢の中からは、暫く返辞が無かった。しのび泣きかと思われる微な声が時々洩れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。

袁慆は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐しげに久闊を叙した。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人とももの前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決っているからだ。しかし、今、図らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭いとわず、曾て君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか。

後で考えれば不思議だったが、その時、袁慆は、この超自然の怪異を、実に素直に受容うけいれて、少しも怪もうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行を停とめ、自分は叢の傍に立って、見えざる声と対談した。都の噂さ、旧友の消息、袁慆が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等らが語られた後、袁慆は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた。草中の声は次のように語った。

「山月記」

明年に至りて、陳郡の袁慆、監察御史を以て詔を奉じて嶺南に使し、傳に乗りて商於の界に至り、晨に將に去らんとす。其驛吏白して曰く、道に虎あり暴にして人を食ふ。故に此に途する者は晝にあらざれば敢て進むなし。今尚ほ早し。願くは且らく車を駐め、決して前むべからずと。慆怒りて曰く我は天子の使にして後騎極めて多し。

山澤の獸能く害をなさんやと。遂に駕を命じて行く。去りて未だ一里を盡さざるに果して虎あり、草中より突りて出づ。慘驚くこと甚し。俄に虎身を草中に匿し、人聲に言つて曰く、異なるかな幾んど我が故人を傷んとせりと。慘其音を聆くに李徴なるものに似たり。慘昔徴と同じく進士の第に登り、分極めて深し、別れて年あり、忽ち其語を聞き既に驚き且つ異んで測るなし。遂に問ひて曰く、子を誰とかなす、豈故人隴西子にあらずやと。虎呼吟すること數聲、嗟泣する狀の若し。已にして慘に謂つて曰く、我は李徴なりと。慘乃ち馬より下りて曰く、君何に由りて此に至れる。且つ慘始め君と場屋を同うすること十余年情好歡すること甚しく、他友に愈れり。意はざりき吾れ先づ仕路に登らんとは。君亦繼いで科選に捷つ。睽間言笑時を歷ること頗る久し。傾風結想、渴つして飲を待つが如し。幸に出でて使用するに因り此に君に遇ふを得たり。而るに乃ち自ら草中に匿るるは、豈故人疇昔の意ならんやと。虎曰く吾れ已に異類となる。使君吾が形を見れば、則ち且に畏怖して之を惡まん。何ぞ疇昔を之れ念ふに假あらんや。然りと雖君遽に去るなく、少しく款曲を盡すを得ば、乃ち我の幸なりと。慘曰く、我れ素と兄を以て故人に事ふ。願くは拜禮を展べんと。乃ち再拜す。虎曰く我れ足下と別れてより音容曠阻すること且つ久し。僕夫恙なきを得たるか、官途淹留を致さざるか。今又何にか適く。向者君二吏あり、驅りて進み、驛隸印囊を挈へて以て導くを見たり。庸ぞ御史となりて出で使用するにあらざらんやと。慘曰く、近者幸に御史の列に備るを得、今使を嶺南に奉ずと。虎曰く吾子文學を以て身を立て、位朝序に登る、盛なりと謂ふべし。況んや憲台は清峻百揆を分糾す。聖明慎んで擇び、尤も人に異なり。心に故人の此地に居るを喜ふ。甚だ賀すべしと。慘曰く往者吾れ執事と同年に名を成し、交契深密なることと常友に異れり。聲容間阻りてより去日流るるが如し。風儀を想望して心目俱に斷ゆ。意はざりき今日君が舊を念ふの言を獲んとは。然りと雖も執事何為れぞ我を見ずして自ら草木の中に匿る。故人の分、豈是の如くなるべけんやと。虎曰く我れ今人たらず、安んぞ君を見るを得んやと。慘曰く願くは其事を詳にせんと。

「人虎伝」

ここでの最初の一文を「人虎伝」では「明年に至りて、陳郡の袁慘、監察御史を以て詔を奉じて嶺南に使し、傳に乗りて商於の界に至り」とし、「山月記」では「翌年、監察御史、陳郡の袁慘という者、勅命を奉じて嶺南に使し、途に商於の地に宿った。」としている。伝えている内容はほぼ同じといえるが、ただ、「山月記」の方は「傳に乗りて」を省略している点だけが、わずかに異なっている。

続いて、「人虎伝」では「晨に將に去らんとす。其驛吏白して曰く、道に虎あり暴にして人を食ふ。故に此に途する者は晝にあらざれば敢て進むなし。今尚ほ早し。願くは且らく車を駐め、決して前むべからずと。」とし、「山月記」では「次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、馱吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。」としている。すなわち、ここでも「山月記」はほぼ原典を踏襲しているのである。

続いて、「人虎伝」では「惨怒りて曰く我は天子の使にして後騎極めて多し。山澤の獸能く害をなさんやと。遂に駕を命じて行く。」とし、「山月記」では「袁惨は、しかし、供廻の多勢なのを待み、馱吏の言葉を斥けて、出発した。」としている。この部分においては、「山月記」は原文を簡略化した表現を採っている。

次のいよいよ虎が現れる場面には「山月記」では「残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時」という情景描写が付け加えられている。すなわち、原典よりもずっと小説としての世界を作り上げているのである。また、李徴と袁惨が「残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時」に出会って、月が「既に白く光を失った」時に別れたということから見ると、中島敦は現実と離れて、夢みだいな世界を作り上げ、この「超自然の怪異」を読者により簡単に受け入れられると考えられる。

続けて、「人虎伝」では「去りて未だ一里を盡さざるに果して虎あり、草中より突りて出づ。惨驚くこと甚し。俄に虎身を草中に匿し、」とし、「山月記」では「果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁惨に躍りかかるかと見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。」としている。表現が多少違っているが、「山月記」のほうがより臨場感のある小説らしい表現になっているとは言えそうである。

続いて、「人虎伝」では「人聲にて言つて曰く、異なるかな幾んど我が故人を傷んとせりと。」とし、「山月記」では「叢の中から人間の声で「あぶないところだった」と繰返し呟くのが聞えた。」としている。中島敦はここでもより簡潔な言葉で、読者に懸念を与えて、この小説に興味を持たせるのである。

続いて、「人虎伝」では「惨其音を聆くに李徴なるものに似たり。」とし、「山月記」では「その声に袁惨は聞き憶えがあつた。」としている。ここもほぼ原文通りである。

これに続く部分は「人虎伝」では「別れて年あり、忽ち其語を聞き既に驚き且つ異んで測るなし。遂に問ひて曰く、子を誰とかなす、豈故人隴西子にあらずやと。」とし、「山月記」では「驚懼の中にも、彼は咄嗟に思いあたって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」としている。ここもほぼ原文通りである。

続いて、「人虎伝」では「惨昔徴と同じく進士の第に登り、分極めて深し」とし、「山月

記」では、「袁儻は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かった李徴にとつては、最も親しい友であった。」としている。この部分もほぼ原文と同じだが、次の「温和な袁儻の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。」は原文にはなく、中島敦が付け加えたものである。ここで特に注目すべきなのは「峻峭」と「温和」という二つの言葉である。

『大漢和辞典』では、「峻峭」を次のように説明する。

- 一、 山などのけはしいさま。又、其の處。
- 二、 すぐれて気高せきこうい。

ここでは、二番の意味がふさわしいだろう。そして「峻峭」と「温和」は対比的な言葉で扱われている。すなわち「温和な袁儻」と「峻峭な李徴」というふうには、二人の性格を対照的に描き出すことで、小説に立体感を与えるとともに、二人のそれぞれの人生の違いをも暗示しているのである。

続いて、「人虎伝」では「虎呼吟すること數聲，嗟泣する狀の若し。」とし、「山月記」では「叢の中からは、暫く返辞が無かつた。しのび泣きかと思われる微な声が時々洩れるばかりである。」としている。ここで、李徴が声を出すことに対する躊躇が表わされているであろう。そして虎になった李徴が自分の姿を昔の友人に見せたくないプライドと友人に会いたい気持ちの葛藤をも暗示しているのである。

続いて、「人虎伝」では「已にして儻に謂つて曰く、我は李徴なりと。」とし、「山月記」では「ややあつて、低い声が答えた。「如何にも自分は隴西の李徴である」と。」としている。ここもほぼ原文通りであるが、「ややあつて、低い声が答えた。」という言葉は中島敦が付け加えたものである。これによって、李徴が昔の友人袁儻に対しての卑屈感を読者に与えているのである。

ところが、「人虎伝」では「儻乃ち馬より下りて曰く、君何に由りて此に至れる。且つ儻始め君と場屋を同うすること十余年情好飲すること甚しく、他友に愈れり。意はざりき吾れ先づ仕路に登らんとは。君亦継いで科選に捷つ。睽間言笑時を歴ること頗る久し。傾風結想、渴つして飲を待つが如し。幸に出でて使用するに因り此に君に遇ふを得たり。」とし、「山月記」では「袁儻は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐しげに久闊を叙した。」としている。この部分においては、「山月記」は原文を簡略化した表現を採っている。

続いて、「人虎伝」では「而るに乃ち自ら草中に匿るるは、豈故人躊昔の意ならんや」とし、「山月記」では「そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。」としている。ここでの意味はほぼ原文の通りである。

ところが、「人虎伝」では「虎曰く吾れ已に異類となる。使君吾が形を見れば、則ち且に

畏怖して之を悪まん。」とし、「山月記」では「李徴の聲が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人ともの前にあさましい姿をさせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決っているからだ。」としている。ここもほぼ原文の通りである。

続いて、「人虎伝」では「何ぞ疇昔を之れ念ふに假あらんや。」とし、「山月記」では「しかし、今、凶らずも故人に遇うことを得て、愧赧の念をも忘れる程に懐かしい。」としている。ここで意味はほぼ原文の通りであるが、多少言葉使いが違っている。「愧赧」を『日本国語大辞典』では以下のように説明している。

「愧」は恥じる、「赧」は赤くなる。恥じて、赤い顔をする事。赤面すること。<sup>注十一</sup> 赧愧。

また、『大漢和辞典』では、「愧赧」を次のように説明する。

はぢて赤面する。あかはぢをかく。<sup>注十二</sup> 愧赧。

すなわち、ここで「山月記」の方では李徴の羞恥心が強調され、表現されているのである。

続いて、「人虎伝」では「然りと雖君遽に去るなく、少しく款曲を盡すを得ば、乃ち我の幸なりと。」とし、「山月記」では「どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭いとわず、曾て君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか。」としている。ここはほぼ原典を踏襲したものと見てよいが、中島敦は「我が醜悪な今の外形を厭いとわず」といった表現を付け加えて、李徴が異類である自分に対しての嫌悪感を強調しているのである。

ところが、「山月記」では「後で考えれば不思議だったが、その時、袁倅は、この超自然の怪異を、実に素直に受容うけいれて、少しも怪もうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行を停とめ、自分は叢の傍に立って、見えざる声と対談した。」とし、「人虎伝」では「倅曰く、我れ素と兄を以て故人に事ふ。願くは拜禮を展べんと。乃ち再拜す。」としている。両方を比べると、内容は全くといっていいほどに違っている。中島敦は「人虎伝」のこの部分をカットして、先のように創作した。山本周子氏はこの部分について、「近代の人間を読み手に持つ中島にとって読者が袁倅と共にもつであろう疑問は当然、予期されたことであつたろうが、彼の意図があくまでも近代的苦悩を背負った人物造型にあつた以上、この文はぜひとも入れなくてはならなかつた。」<sup>注十三</sup> というように述べている。確かに、ここには、読者に袁倅が李徴に出会った時の心理描写が必要である。また、この超自然の怪異を素直に受け入れた袁倅は前文のように「温和」という性格の設定とも結び付いているのであろう。

続いて、「人虎伝」では「虎曰く我れ足下と別れてより音容曠阻すること且つ久し。僕夫

恙なきを得たるか、官途淹留を致さざるか。今又何にか適く。向者君二吏あり、驅りて進み、驛隸印囊を挈へて以て導くを見たり。庸ぞ御史となりて出で使用するにあらざらんやと。慘曰く、近者幸に御史の列に備るを得、今使を嶺南に奉ずと。虎曰く吾子文學を以て身を立て、位朝序に登る、盛なりと謂ふべし。況んや憲台は清峻百揆を分糾す。聖明慎んで擇び、尤も人に異なり。心に故人の此地に居るを喜ぶ。甚だ賀すべしと。慘曰く往者吾れ執事と同年に名を成し、交契深密なることと常友に異れり。聲容間阻りてより去日流るるが如し。風儀を想望して心目俱に斷ゆ。意はざりき今日君が舊を念ふの言を獲んとは。然りと雖も執事何為れぞ我を見ずして自ら草木の中に匿るる。故人の分、豈是の如くなるべけんやと。虎曰く我れ今人たらず、安んぞ君を見るを得んやと。慘曰く願くは其事を詳にせんと。」とし、「山月記」では「都の噂さ、旧友の消息、袁慘が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等らが語られた後、袁慘は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた。草中の声は次のように語った。」としている。この部分においては、「山月記」は原文を簡略化した表現を採り、そのことによって、友人同士の間係を読者に託して想像させる効果をあげているのである。以上、それぞれ李徴と袁慘の出会い場面についての描写から比べると、「山月記」はほぼ「人虎伝」を踏襲したものであるが、中島敦は自分の創作を文中に書き加えて、李徴の袁慘に対しての卑屈感、袁慘に会いたいが、自分の姿を見せたくない矛盾な気持ち、化け物である李徴の羞恥心を読者に生々しく感じさせるのであろう。

注一 氷上英広 「氷上英広書簡三五」 《中島敦全集別巻》 筑摩書房 二〇〇二年五月） 昭和十七年八月消印 葉書

注二 岩田一男氏は「山月記」雑談」の中に新釈漢文大系四十四『唐代伝奇』（内田泉之助・乾一夫著、明治書院・昭和四十六年九月二十五日初版発行）にある「人虎伝」を使っている。

注三 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版 第五卷 小学館株式会社 二〇〇一年一二月

注四 諸橋轍次 『大漢和辞典』縮写版 第七卷 大修館書店 昭和四十九年九月

注五 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版 第八卷 小学館株式会社 二〇〇一年一二月

注六 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版第四卷 小学館株式会社 二〇〇一年一二月

注七 諸橋轍次 『大漢和辞典』縮写版 第一卷 大修館書店 昭和四十九年九月

- 注八 諸橋轍次 『大漢和辞典』縮写版 第十卷 大修館書店 昭和四十九年九月
- 注九 木村和信 「山月記」論——「滅び」への恐れ—— 「中島敦論」 双文社出版  
昭和六十一年二月
- 注十 諸橋轍次 『大漢和辞典』縮写版 第四卷 大修館書店 昭和四十九年九月
- 注十一 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版 第四卷 小学館株式会社 二〇〇〇年一二月
- 注十二 諸橋轍次 『大漢和辞典』縮写版 第四卷 大修館書店 昭和四十九年九月
- 注十三 山本周子 「中島敦「山月記」考」 二松学舎大学人文論叢（二十九） 二松学舎大学人文学会 一九八四年

## 第二章 詩に執着する李徴

### 第一節 作品における変身の意味

続いて、「山月記」と「人虎伝」の李徴が虎に変身する経過を告白する場面を比較して、作品における李徴の変身の意味を明らかにしてみたい。それぞれの原文は次のようになっている。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと思わねばならなかった時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残酷な行いのあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。ちょうど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎と

して狂い廻り、今日のように途で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいたのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。なのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上に成った者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。

「山月記」

虎曰く我が前身客呉楚に客たり。去歳方に還る。道汝墳に次り忽ちに嬰りて發狂し、夜戸外に吾が名を呼ぶ者あるを聞く。遂に聲に応じて出で山谷の間を走り、覺えず左右の手を以て地を攫みて歩す。是れより心愈狼、力愈倍せるを覺ゆ。其肱髀を視るに及びては則ち毛の生ぜるあり。心甚だ之を異す。既にして溪に臨みて影を照らせば己に虎と成れり。悲慟することと良久し。然れども尚ほ生物を攫みて食ふに忍ぶず。既に久しく飢えて忍ぶべからず。遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ。又久しくして諸獸皆遠く避けて得る所なし。飢益々甚し。一日婦人あり山下より過ぐ。時正に餓迫る。徘徊すること数四、自ら禁ずる能はず。遂に取りて食ふ。殊に甘美なるを覺ゆ、今其首飾尚ほ岩石の下に在り。是れより冕して乗る者、徒して行く者、負ひて趨る者、翼ありて翔ける者、毳ありて馳する者を見れば、力の及ぶ所悉く擒へて之を阻し、立ちちどころに盡す。率ね以て常となす。妻孥を念ひ朋友を思はざるにあらざれども、ただ行の神祇に負けるを以て、一旦化して異獸となり、人に覲づるあり。故に分として見えず。嗟乎我れと君とは同年に登第し、交契素より厚し。君は今日天憲を執り親友に輝す。而も我は身を林藪に匿し永く人寰を謝る。躍りて天を呼び俛して地に泣くも、身毀れて用ひられず。是れ果して命なるかと。因つて呼吟咨嗟し殆ど自ら勝へず、遂に泣く。慘且つ問ひて曰く、君今既に異類となる、何ぞ尚ほ能く人言するやと。虎曰く、我れ今形變じて心悟むるのみ。此地に居りてより歲月の多少を知らず、ただ草目の榮枯を見るのみ。近日絶えて過客なく、久しく飢えて堪へ難し。不幸にして故人に唐突し、慙惶すること殊に甚しと。慘曰く、君久しく飢うれば某に餘馬一疋あり、留めて以て贈となさば如何と。虎曰く吾が故人の俊乗を食ふは、何ぞ吾が故人を傷るに異ならんや。願くは此を反さんと。慘曰く食籃中に羊肉数斤あり、留めて以て贈と

なさば可ならんかと。又曰く、我れと君と真に忘形の友なり、而して我れ將に託する所あらんとす、可ならんかと。

#### 「人虎伝」

最初の部分について、「人虎伝」では「虎曰く我が前身客呉楚に客たり。去歳方に還る。道汝墳に次り忽ちに嬰りて發狂し、夜戸外に吾が名を呼ぶ者あるを聞く。」とし、「山月記」では「今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。」としている。「人虎伝」の方は、發狂して、外に出たという描写で、「山月記」の方は「發狂」をあえて採用していない。中島敦はその時点での李徴をあくまでも理性的な存在として描いている。そして、この違いは非常に大きいといわなければならない。中村良衛氏は「發狂」とは気が触れたといった意味ばかりでなく、この「狂悖の性」が發見したこともあっただろうと示している。<sup>注</sup>確かに、中村氏の指摘の通りに、中島敦の「山月記」の李徴が一年間に、彼が「昔鈍物としての齒牙にもかけなかった其の連中の下命を拝さねばならぬ」という屈辱の状況で、自尊心を傷付けられたのは想像には難くない。しかし、李徴は生活のために、このような状況に我慢するしかない。そして、李徴はその自尊心を抑えなければならなかった。官職に戻った李徴が一年経って、遂に、その抑えられた自尊心が臨界に達し、そして李徴の内面にある「狂悖の性」が表に出てしまった。一方、「人虎伝」の「發狂」は単に気が狂うことを示すので、中島敦はここで「發狂」を使わずに、李徴が自分の「狂悖の性」を發見したことを読者に伝え、その時点での李徴をあくまでも理性的な存在として描いている。

続いて、「人虎伝」では「遂に聲に応じて出で山谷の間を走り、覺えず左右の手を以て地を攫みて歩す。是れより心愈狼、力愈倍せるを覺ゆ。其肱髀を視るに及びては則ち毛の生ぜるあり。心甚だ之を異す。既にして溪に臨みて影を照らせば已に虎と成れり。」とし、「山月記」では声に應じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覺えず、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。」としている。ここで、表現は違っているが、伝えている意味内容はほぼ原文の通りである。

ところが、これに続いて「山月記」では「自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然

とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。」としている。この部分は「人虎伝」にはない。すなわち、この部分は中島敦が創作した部分である。ここでは、李徴が虎になったとしても、自己内省することができ、理性的な存在として描かれている。また、内面的心理描写から見ると、まさしくこれこそが近代小説として書かれていたことが確認できる。

また、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。」という部分は李徴の人生観が表れている部分である。虎になった李徴が虎になる理由は分からずに素直に現実を受け入れて生きていく。中島敦はこのような、容易に宿命に妥協し、現実を受け入れる人生観を持つ李徴を造型した。そのことで、詩業としても、官職としても、中途半端であった李徴像がより容易に読者に受け入れられる。さらには、「生きもの」と語られているように、これは人間ばかりではなく、生き物全体にとっての宿命なのである。

続いて、「人虎伝」では「然れども尚ほ生物を攫みて食ふに忍ぶず。既に久しく飢えて忍ぶべからず。」としている。この部分は「山月記」にはなかった。すなわち、中島敦がこの部分をカットしたのである。理屈っぽさ、あるいは説明的であることを捨てて、より小説的なダイナミズムを取ったからであろう。そのことはこれに続く部分で一層明らかになる。「人虎伝」では「遂に山中の鹿豕獐兔を取りて食に充つ。」とし、「山月記」では「自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駈け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。」としている。まさにこれは李徴が野生動物になった瞬間を描いているのである。しかし、「再び自分の中の人間が目覚ました」という描写があることから李徴が完全に虎になつてしまつたのではないことを示している。これは「虎としての最初の経験であった」と語っているが、これは李徴が虎になつたという現実を受け入れたことを示しているのである。

続いて、「人虎伝」では「又久しくして諸獣皆遠く避けて得る所なし。飢益々甚し。一日婦人あり山下より過ぐ。時正に餓迫る。徘徊すること数四、自ら禁ずる能はず。遂に取りて食ふ。殊に甘美なるを覚ゆ、今其首飾尚ほ岩石の下に在り。是れより冕して乗る者、徒して行く者、負ひて趨る者、翼ありて翔ける者、蠢ありて馳する者を見れば、力の及ぶ所悉く擒へて之を阻し、立ちちどころに盡す。率ね以て常となす。」としているが、「山月記」にはこの部分はまったく見られない。なぜならば、「人虎伝」の方では、李徴は人間の女性を食つてしまい、それを「甘美」とまでいっている。すなわち、この時点でもう完全に虎

になってしまっているのである。一方、「山月記」では、李徴は人間と虎の間で苦しんでいる。すなわち「一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って来る。」という表現が、如実にそのことを語っている。そして、まさにここからの部分こそが「山月記」の最大の特徴であるといえる。「そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残酷な行いのあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。」という表現がある。この部分では李徴は人間の心を失ってしまったことに苦しんでいるのである。

李徴が虎に変身する経過について、中村良衛氏は次のように述べている。

まさにその瞬間に目の前に一匹の兎が現れ、彼は自らの意志とは関わりなく、虎としての現実を生きるしかないとしたたかに味わう。それh獣性の目覚めとよぶなら、ここで一旦姿を消した「自分の中の人間」は理性と呼んでもいい。意識としては人間なのに、それを裏切るかのように、しばしば虎としての行動を取ってしまうという現実。彼はそれを「運命」という概念を多用しながら、徐々に仕方のないものとして受け入れていく。それまでは、「人間の心で虎としての己の残酷な行いの跡を見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい」と人間（理性）の側から虎（獣性）に対する嘆きが述べられていたが、次第に、理性の方が変質し、獣性に侵されていくのである。<sup>注二</sup>

また、村上隆彦氏は「李徴の変身は外面的変身と内面的変身（と仮りに名づければ）が乖離した形をとって漸進的に進行している。李徴における虎的性格と人間的性格、両者の相関関係あるいは相剋のありさまをみると、虎的性格の進捗につれてかえって内面にある人間的性格は人間的な要素を強めていつている。」と述べている。<sup>注三</sup>

一方、松井茜氏は「李徴は、虎になった原因は自分の内面にあつたと考えたのである。それは同時に、李徴の虎への認識が変化したことも示している。「人間」と同居していた虎も己の一部分なのだ気づき、内面の「虎」を認めたのである。」と指摘している。<sup>注四</sup>

確かに、松井氏の指摘の通りに、虎になった李徴は内面的に自分が「虎」であることを認めた。しかし、この変身の経過は、中村氏と村上氏の指摘の通りに、李徴の変身は外面的な変身から、内面的な変身へ、理性から獣性への変質である。この変質は、中島敦は「運命」という言葉を使い、李徴の避けられない悲劇に対しての無力感を読者に伝えていると考えられる。

また、「山月記」では「その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなつて行く。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が

付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。」としている。この部分では李徴がどんどん虎になって、人間にかえる時間が短くなってしまふことを不安に思っている。しかも、この不安は不安にとどまらず、李徴にとっては宿命的なものであり、絶対に避けることができないのである。

さらに、「山月記」では「己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じていたのだ。」としている。李徴は自分の心がすっかり消えて幸せになると思っているが、一方そのことを恐ろしく感じてもある。その矛盾する感情に李徴は襲われるのである。それが頂点に達するのは「ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！」という表現である。そして、「この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。」と繰り返して語られるように、この時に李徴は圧倒的に孤独の状態に置かれているのである。

一方、「人虎伝」では「妻孥を念ひ朋友を思はざるにあらざれども、ただ行の神祇に負けるを以て、一旦化して異獣となり、人に覗ぶるあり。故に分として見えず。嗟乎我れと君とは同年に登第し、交契素より厚し。君は今日天憲を執り親友に輝す。而も我は身を林藪に匿し永く人寰を謝る。躍りて天を呼び俛して地に泣くも、身毀れて用ひられず。是れ果して命なるかと。因つて呼吟咨嗟し殆ど自ら勝へず、遂に泣く。惨且つ問ひて曰く、君今既に異類となる、何ぞ尚ほ能く人言するやと。虎曰く、我れ今形變じて心悟むるのみ。此地に居りてより歳月の多少を知らず、ただ草目の栄枯を見るのみ。近日絶えて過客なく、久しく飢えて堪へ難し。不幸にして故人に唐突し、慙惶すること殊に甚しと。惨曰く、君久しく飢うれば某に餘馬一疋あり、留めて以て贈となさば如何と。虎曰く吾が故人の俊乗を食ふは、何ぞ吾が故人を傷るに異ならんや。願くは此を反さんと。惨曰く食籃中に羊肉数斤あり、留めて以て贈となさば可ならんかと。又曰く、我れと君と真に忘形の友なり、而して我れ將に託する所あらんとす、可ならんかと。」としているが、「山月記」には、この部分はまったく語られてはいない。この中で特に注目すべきは「命」という言葉である。すなわち、「人虎伝」における李徴は自分が虎になってしまったことを「命」と捕らえているのである。

高田瑞穂氏は次のように指摘している。

「人虎伝」中の李徴に対して、「山月記」の彼は、ひたすら、自己の直面しつつある恐怖を告白する。それは二重の恐怖である。立還った「人間の心」において、「虎としての己の残虐な行」をふりかえる恐怖と、「人間の心が還つて来る」時間が、「日を経るに従つて次第に短くなつて行く」恐怖と。しかも、これら二つの恐怖は、たがいに

背反しつつ互に他を成立させる点において、相乗的に二つの恐怖のそれぞれを深刻にせずにはいない。<sup>注五</sup>

確かに、この告白する場面は李徴の恐怖感が表れている。「山月記」の李徴の呟く「己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。」との言葉も、誇張ではなく、作者本人の実感によるものである。このように見てくると、「山月記」における李徴の最初の独白は、その表面上の言葉以上に根深い作者の人間存在への懐疑、不安が込められているようである。しかしながら、続いて李徴はまた言う、「ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！己が人間だった記憶のなくなることを。」これはまさに、李徴という一人の人間存在が滅びようとすることを恐れての叫びといえよう。人間存在への不安、もしくは矛盾しているともいえる気持ちがここではつきり現れている。李徴は人間と虎とに引き裂かれてしまった状態にいる。一匹の兎を見ると、「人間は忽ち姿を消し」、再び、「人間が目を覚めた時」、己の運命に恐れ、また戦かざるを得ない。そして今、李徴は次第に人間性を失いつつあることを恐れているのである。

以上、「山月記」と「人虎伝」の李徴が虎に変身する経過を告白する場面によって、「山月記」では李徴がこの避けえない宿命の中で、不安や孤独を感じて、自分が人間の心を失うことに恐怖していることを示しているのである。

## 第二節 詩人李徴

続いて、「山月記」と「人虎伝」の李徴が袁俊に詩を託す場面を比較して、中島敦は自身自身が詩に執着する李徴に投影することを明にしてみよう。それぞれの原文は次のようになっている。

袁俊はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなっていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍って一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。

袁修は部下に命じ、筆を執って叢中の声に随って書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡お三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁修は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないかと。

旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るか如くに言った。

羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれていた様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人に成りそなうて虎になった哀れな男を。（袁修は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐を即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きているしるしに。

袁修は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成嘯

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

「山月記」

虎曰く我れ舊文数十篇あり。いまだ代に行はれず。遺藁ありと雖當に儘く散落すべし。君我が為に傳録せば、誠に文人の口闕に列する能はざるも、然も亦子孫に傳ふるを貴ぶなりと。修即ち僕を呼び筆を命じ、其口に随って書せしむ。二十章に近し。文甚だ高く、理甚だ遠し。閲して歎ずること再三に至る。虎曰く此れ吾が平生の業なり。又安んぞ寝めて傳へざるを得んやと。既にして又曰く、吾れ詩一篇を爲らんと欲す。蓋し吾が外異りと雖、中異る所なきを表せんと欲す。亦以て吾が懐を道ひて吾が憤を攄べんと欲するなりと。修復た吏に命じ筆を以て之に授けしむ。詩に曰く、

偶々狂疾に因つて殊類と成り、災患相仍りて逃るべからず。今日爪牙誰か敢て敵

せん。當時聲跡共に相高し。我れ異物となる蓬茅の下、君已に輶に乗り氣勢豪なり。此夕溪山明月に對し、長嘯を成さずして但嗥るを成す

と。慘之を覽て驚いて曰く、君の才行我れ之を知れり。而も君の此に至れるは、君平生自ら恨むあるなきを得んやと。虎曰く二儀の物を造る、固より親疎厚薄の間なし。其の遇ふ所の時、遭ふ所の數の若きは、吾れ又知らざるなり。噫顔子の不幸冉有の斯疾、尼父常て深く之を歎ぜり。

#### 「人虎伝」

まず、「人虎伝」では「虎曰く我れ舊文數十篇あり。いまだ代に行はれず。遺藁ありと雖當に儘く散落すべし。君我が為に傳録せば、誠に文人の口闕に列する能はざるも、然も亦子孫に傳ふるを貴ぶなり」とし、「山月記」では「袁慘はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。他でもない。自分は元來詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩數百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが數十ある。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。」としている。ここで、「山月記」の前半の部分は表現が違っているが、意味はほぼ「人虎伝」と同じである。一方、その「何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。」という部分は「人虎伝」にはなかった。つまり、これは中島敦のオリジナルの創作部分である。この部分では、李徴が詩への執着心が表れているのである。「山月記」は中島敦が三十三歳の時に発表された作品である。しかも、「山月記」は中島敦のデビュー作である。つまり、中島敦は「山月記」を創作する時、まだ小説家として認められていなかった。当時、中島敦は病気に苦しんでいた。その時の中島敦自身の姿からも自分が死んでも小説家として認められたいという気持ちがあると思われるだろう。つまり、ここで、中島敦は自分自身の境遇と感情を李徴に投影したと考えてもいいだろう。

続いて、「人虎伝」では「慘即ち僕を呼び筆を命じ、其口に随つて書せしむ。」とし、「山月記」では「袁慘は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。」としている。ここでは、「山月記」はほぼ原典通りである。

続いて、「人虎伝」では「二十章に近し。文甚だ高く、理甚だ遠し。閲して歎ずること再三に至る。」とし、「山月記」では「長短凡お三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。」としている。ここでは、多少表現が違っていたが、意味はほぼ原典と同じだと考えられる。

ところが、「山月記」の方で、「しかし、袁儻は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか、と。」としている。この部分は「人虎伝」には語られていない。つまり、この部分も中島敦のオリジナルな創作である。従来、研究者たちが「何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがある」として、問題点を指摘してきた。藤村猛氏は次のように述べている。

何が欠如しているのかを袁儻に明らかにしていない。前述した李徴の精神的弱さが思い浮かぶが、それ以外に何が該当しようか。それを考える為に少し前に戻って、李徴の詩の特徴を見てみたい。「格調高雅、意趣卓逸」とある。これは奇妙な事ではなからうか。李徴が袁儻に語った詩は、彼が自ら良しとする詩なのであろう。だが、それが彼自身や彼の生活と距離を持っているのである。<sup>注六</sup>

李徴が虎になる前に生活に苦しんでいたことは確かである。しかし、彼の詩は「格調高雅、意趣卓逸」で、彼の生活とは離れている。また、李徴自身「性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く」という性格のせいで、人と交を絶った。それらが原因で、李徴の詩作は現実と距離を持って、彼の詩をどこか欠けた所があると思わせるのであろう。

藤村氏は「何が欠如しているのかを袁儻に明らかにしていない」と指摘しているが、では李徴に欠けていたのは何だったのであろうか。まず、李徴の自分の詩についての告白は次のように書かれている。

己は詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。

この部分から見ると、李徴が人と交わって切磋琢磨に努めていないから、自分がひたすら詩を作るにもかかわらず、聞き手がなかった。しかも、自分の詩のよさと悪さの評価も聞くことができなかった。それが原因で、李徴の詩は何か欠けていたと感じさせるのだろう。

また、李徴は妻子のことを託す時、自嘲的な調子で「本当は、先ず、この事の方を先にお願いすべきだったのだ、己が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。」と言った。この自嘲の言葉から見ると、道德の面で、李徴の人間性もまたどこか欠けているのだろう。

さらに、李徴が自分の才能の不足を暴露することの卑怯と刻苦を厭うことで、専一に腕を磨いてなかった。それも李徴の欠けるところである。

「人虎伝」になく、「山月記」にあるものとして、注目されるのは、袁慆を通じて李徴の詩が批判されている部分である。「しかし、袁慆は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘だが、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか、と。」これは中島自身のことばである。ということは、中島は李徴の中に自己を投じつつ、ときに袁慆の中にも自己を分ち与えていたということになる。すると、この部分は明らかに、一の自省であり自己批判とならざるをえない。すると「非常に微妙な点に於て」とは、どういう点においてであるのだろうか。中島はかえって李徴をしてその間に答えさせる。「嗤って呉れ。詩人に成りそこなって虎になった哀れな男を。」と。しかし、これでは一種の同義反覆にすぎない。そこで中島は、そういう李徴の「今の懐」を「人虎伝」中の一詩において読者に告げる。それとても、もちろん、「非常に微細な点」を明らかにするには不十分である。何故なら、李徴はすでに「人虎伝」中の人物であるにとまらないからである。中島の筆はおのずから、独自の李徴観を示す<sup>※七</sup>べき必要にせまられる。

まず、高田瑞穂氏は中島敦は自分を李徴に投影し、自省であり自己批判があるゆえに、この「非常に微妙な点」で独自の李徴観を読者に示していると述べている。しかし、「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか、と。」という部分は袁慆から李徴の詩についてのコメントであり、中島敦の創作部分である。というのは、中島敦は袁慆の口を借りて、李徴の詩に対して、自分の意見を述べていたのではないか。袁慆は李徴と同年に進士の第に登り、李徴と同じように才能を持っていることがわかる。しかし、今の袁慆は監察御史であり、李徴と比較にならないように存在である。中島敦は袁慆の口から、李徴の詩に主観的な評価を与える意図があったのだろう。しかも、非常に微妙な点に於て欠ける所を明らかに解釈しなかったことから見ると、中島敦は自分が袁慆に投影して、虎になった李徴の境遇、李徴が詩に対する執着を同情の気持ちを持っていたと言えるだろう。

奥野政元氏は「欠ける所」について次のように述べている。

これによれば、袁儻は決定的に李徴とは異なった一人の作中人物として、形像されていることが明らかである。李徴と袁儻との、これらの対立については、すでに千葉一氏が、特に先の「欠ける所」云々の持つ作品中での意味にふれ、それが李徴に対する残酷な批評であり、だからこそ内言として、隠蔽されねばならなかったと指摘している。しかし内言だとしても、これはあくまでも、袁儻個人の実感なのであり、このような実感の生み出されてくる土台として、袁儻の個性と、作中人物としての存在意味とがある筈である。李徴の詩約二十篇が、作中では全く伏せられている限り、袁儻のこの感想は確かめようのない純然たる感じてある。またたとえ、それらの詩が示されたとしても、第一流が否かの判断にはどうしても主観的なものにつきまとう。これはあくまでも、そのような主観的限定をつけられた袁儻の個人的判断なのである。このようにして、袁儻は李徴の本質と絶対的には入れないその存在意味を開示するのであり、そのことよって、李徴の姿を一層際立たせることにもなっているのだと言えよう。その上袁儻はこの実感を心に秘めて、李徴にはつけていたにしても、かれは李徴の傍らを通りすぎていく人でしかない。袁儻の認識、感情、人格のうちに、李徴は収まりきるような存在ではないのである。李徴自身、自分で自分をおさめきれなかったのである。<sup>注八</sup>

一方、木村一信氏は「作者は、袁儻と李徴とを徴の「詩」を間においてそれぞれ対比的な関係をなすものとして描いている。一方は、率直に「詩」への不満足感を抱き、また一方、「己の乏しい詩業」に「執着」するのみで、詩人としての地位に対する心のこりは幾分か有していても、「詩」そのものがどの程度の出来栄えを示すものであるかについては、意を払っていないのである」<sup>注九</sup>と指摘している。

では、袁儻は李徴をどのように見ていたであろうか。まず、袁儻は「若くして名を虎榜に連ね」李徴の才能があることを認めていたと考えられる。この才能がある李徴は今の虎になつてしまった境遇について袁儻は李徴に同情の気持ちを持っているのだろう。袁儻から見る李徴はどこが一番違うのか。李徴は人と交わらないことから見ると、袁儻との違いは孤独である。この違いは李徴が臆病な気持ちを持っているから生み出されると思われる。

さて、中島敦は李徴と袁儻のどちらに、より自己投影していたであろうか。管見氏は「次のように述べている。

「産を破り心を狂はせて迄」、なお「己の乏しい詩業」に「執着」する李徴には、当然、中島の血脈が分たれている。と同時に、その李徴に十二分に好意をもって対面しつつ、冷静に「詩」の批評をなしうる袁儻の背後には、中島の〈自己批評〉のこめられた作家の眼が光っている。とすれば、作者はここで、二人の対比という図式を通し

て自己の文学への思いを語っていると考えられるであろう。<sup>注+</sup>

まず、中島敦は李徴の境遇と自分の境遇に強い共感を持っていると考えられる。一方、中島敦は冷静に袁愴の視線から李徴の詩を評価していた。つまり、熱心に詩を語っていた李徴に中島敦が自己投影したとともに、冷静な袁愴にも投影したと考えるべきである。

続いて、「山月記」では「旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るか如くに言った。羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人に成りそこなって虎になった哀れな男を。（袁愴は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた。）」としている。この部分も「人虎伝」は語られていなかった。つまり、この部分も中島敦の創作した部分である。この李徴の自嘲からみると、李徴が詩人になりたかったがなれない気持ち、また、李徴がもう虎になってしまった事実を受容して、自分の人生はもう失敗したという感情を讀者に伝えるのである。

続いて、李徴が即興的に詩を創作する場面で、「人虎伝」では「偶々狂疾に因つて殊類と成り、災患相仍りて逃るべからず。今日爪牙誰か敢て敵せん。當時聲跡共に相高し。我れ異物となる蓬茅の下、君已に輶に乗り氣勢豪なり。此夕溪山明月に對し、長嘯を成さずして但嘯るを成す」とし、「山月記」でも次のように同じ詩を採用している。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 當時聲跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山對明月 不成長嘯但成嘯

詩の内容から見ると、単に山と月の対照だけでなく、李徴は自分を「山」と喩え、袁愴が「月」に喩えていると考えられる。月は山を照らしているから、李徴は袁愴より自分を卑しく表していた。李徴は本来袁愴と同じ官吏である自分が今虎になってしまったが、袁愴は今昇進して監察御史になることによって、この詩は袁愴を「月」のように高めて、自分を「山」のように低めて詩を作ったものともいえるだろう。中島敦はこの詩から李徴の本心が読み取れ、李徴の卑屈さを感じたからこそ、李徴と袁愴を代表する「山」と「月」を題名として使ったのだと考えられるだろう。

続いて、「山月記」では「時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。」としているが、「人虎伝」ではこの部分は語られていない。つまり、この部分も中島敦のオリジナルな創作である。この環境描写から見ると、

中島敦は山にいる虎と冷やかに照らす月を対照させる雰囲気を描いて、小説としての世界を作り上げているのである。また、この雰囲気に囲まれた李徴の不幸があざやかに読者に伝わるのである。

続いて、「人虎伝」では袁倬が李徴の即興の詩に対して、「と。倬之を覽て驚いて曰く、君の才行我れ之を知れり。而も君の此に至れるは、君平生自ら恨むあるなきを得んやと。虎曰く二儀の物を造る、固より親疎厚薄の間なし。其の遇ふ所の時、遭ふ所の數の若きは、吾れ又知らざるなり。噫顔子の不幸冉有の斯疾、尼父常て深く之を歎ぜり。」という評価がある。一方、「山月記」ではこの部分は語られてはいなかった。つまり、中島敦はこの部分を省略したのである。なぜなら、「山月記」の方では、袁倬は李徴が三十篇詩を託す時に、李徴の詩を評価したからである。また、ここの「顔子」、「冉有」、「尼父」という人物は当時の読者たちには分からないかもしれないので、この部分は省略したのであろう。

以上、それぞれ李徴が袁倬に詩を託す場面についての描写から比べると、中島敦は自身の感情を李徴に投影し、李徴が詩人になりたかったがなれない気持ちを読者に伝え、李徴の不幸を読者に共感させるのである。

注一 中村良衛 「李徴とは誰か——『山月記』私論——」 日本文学第四十九卷 日本

文学協会 二〇〇〇年二月

注二 同注一

注三 村上隆彦 「李徴について——中島敦「山月記」書付け」 親和国文(十五) 親

和女子大学国語国文学会 一九八〇年十二月

注四 松井茜 「中島敦「山月記」について」 愛知大学国文学第四十五号 愛知大学国

文学会 平成十七年十二月

注五 高田瑞穂 「山月記(二)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第三号 学灯社 一

九六〇年一月

注六 藤村猛 『中島敦研究』 平成十年十二月二十日 溪水社

注七 高田瑞穂 「山月記(三)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第四号 学灯社 一

九六〇年二月

注八 奥野政元 「『山月記』ノート」 活水日文二二 活水女子大学 一九九一年三月

注九 木村一信 『中島敦論』 双文社 昭和六十一年二月二十二日

注十 管見 「何処か(非常に微妙な点に於て) 缺ける所」 (木村一信 『中島敦論』

双文社) 昭和六十一年二月二十二日

### 第三章 虎になった李徴

#### 第一節 李徴の告白

続いて、「山月記」と「人虎伝」の李徴の告白する場面を比較して、李徴が虎になった原因を分析してみよう。それぞれの原文は次のようになっていいる。

何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。己は詩によつて名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかった。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了つたのだ。今思えば、全く、己は、己の有つていた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろ、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼る。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向つて咆えた。誰かにこの苦しみが分つて貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎

が怒り狂って、哮っているとしたか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分ってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

「山月記」

若し其自ら恨む所を反求せば、則ち吾れ亦之あり。定めて此に因るを知らざらんや。吾れ故人に遇ふ。則ち自ら匿す所なし。吾れ常て之を記す。南陽の郊外に於て嘗て一孀婦に私す。其家竊に之を知り、常に我を害せんとの心あり。孀婦是れより再び合ふを得ず。吾れ因つて風に乗じて火を縦ち、一家数人儘く之を焚殺して去る。此を恨となすのみと。

「人虎伝」

李徴が虎になった理由を告白する場面では、「人虎伝」と「山月記」では全然違っているのである。

「人虎伝」によると李徴が虎になった原因は、ある寡婦と通じたのを家人に発見され、逢瀬を阻まれたので、怒って風を幸い放火して、一家を殺した罪の報いとしている。それによって、虎になった原因は全く異なることがはっきりわかる。

このことについて、佐々木充氏は次のように述べている。

中島敦は「変身」という要素に対して、それが外因によるものではなく、極めてデリケートな、人間の心のダイナミックスにあることと述べている。つまりここではじめて、「変身」という非現実的要素の奇異性が、単なる物語への興味性としてではなく、人間の内心劇の葛藤のシンボルとして生き始めるのである。<sup>注一</sup>

一方、「山月記」では李徴が虎になる原因は「人虎伝」とまったく違っている。ここで、「山月記」をいくつかの部分に分割して詳しく考察していきたい。

人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。己は詩によって名を成そうと思いがながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として

瓦に伍することも出来なかった。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。

この中で、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」は重要なキーワードであり、中島敦の独創による場面である。「臆病」、「尊大」、「自尊心」、「羞恥心」をそれぞれ『日本国語大辞典』では以下のように説明している。

「臆病」——ちよつとしたことでも恐れおののくこと。気の小さいこと。また、そのようなさま。あるいは、そのような人。注二 小心。

「尊大」——他人に対し、いかにもえらぶつた態度をとること。横柄で高慢なこと。

また、そのさま。おおふう。注三 ごうまん。

「自尊心」——自尊の気持。自分を尊び他からの干渉をうけないで、品位を保とうとする心理や態度。プライド。注四

「羞恥心」——はずかしいと感じる気持。はじらいの気持。注五

人間は自己の欲望に忠実には生きられればこれほど幸せなことはないだろう。理想と現実の隔絶は短いほど結構なことである。だが、現実はそうはいかない。挫折を重ねながら、他人とそして社会と折り合いをつけながら生きていく。それはもろい危険なバランスであることを誰もが知っている。自己を主張し自信があれば、自尊心の塊となり傲慢となる。そして他人を圧殺することになる。自己を殺し、自分の無力さを知るとき臆病になる。ところが、人間は完璧ではいられないため、必ずそれぞれの人間には、得意ではないものがあるはずで、不得意なものを人の前に見せるとき羞恥心が出るのである。自尊心があるからこそ、羞恥心が生じるわけだと考えられる。これはすべての人間に共通することである。

佐々木氏はまた「臆病な自尊心」という言葉は中島敦の個性であると述べている。注六氏は「山月記」だけではなく、初期の私小説風の作品である「かめれおん日記」と「狼疾記」に、すでにいろいろの変奏の形で流れていたし、またそこでは直接「臆病な自尊心」という言葉も使われていて、まさに中島敦のアキレス腱的要素のごときものだったのである。そしてそればかりか、これは、積極的に自我の在りようを、見事に定着したものと深い同感をもって理解されたのであった。また、ここで李徴が虎になった原因を告白する場面には、中島敦の経歴の反映があるだろう。中島敦は東大国文科をへて教職につき、かわら英文学、中国文学を研究した。父祖からの漢学の教養に、その広い読書から得た独自の近代的憂愁を加味して、知識人の宿命、孤独を唱えた作家で、彼の出現は戦時の空白時代の文壇の思いがけぬ収穫として、河上徹太郎、渡辺一夫、手塚富雄、そのほか多くの批評家、作家の賞讃を博した。ところが、中島敦が病気で倒れて、文学に執着する気持ちや、

人間の宿命的な悲しみから、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」が生み出すことがあるかもしれない。

人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の有っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなど口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。

この部分について、「この尊大な羞恥心が猛獣だった。」と再度語っている。木村東吉氏の『山月記』の成立期考で、『山月記』の初期の草稿と思われるメモでは、「羞恥心」に重点が置かれていたとして<sup>注七</sup>いる。「羞恥」という言葉は、恥を感じる状況から逃げたい、もしくは恥を感じた記憶を消したいということで、李徴は自分の「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧」と「刻苦を厭う怠惰」に気が付き、羞恥心がますます膨らんでくる。また、李徴が自らの自嘲的な言葉から見ると、李徴は自分の中途半端な心構えのせいで、詩家として名を成せないことにたまらないほどの後悔を感じている。ここで、中島敦は李徴の悔しさを読者にも感じさせたのである。高田瑞穂氏は「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」について、次のように述べている。

この二つの心は、実は一つのものの表と裏とであった。李徴は刻苦して学んでも、結局自分に詩人たるの天分のないことを自ら証明する結果になるであろうことを恐れたために、ついに無心に勉め励むことをなし得なかつた。<sup>注八</sup>

また、山本周子氏は次のように述べている。

ここに出された「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」とは逆接的表現でありながら同義的に使われている。この二つは互いに相容れぬ対立物ではなく本質は同じくする「性情」としてとらえられる。この二者が李徴の場合一人の人間の中で互いに均衡を崩しながらつき進んでしまったのだといえよう。二者は明らかに「文学」に関係づけて考えられている。<sup>注九</sup>

確かに、李徴の場合も「臆病」、「自尊心」、「尊大」、「羞恥心」がそれぞれ対立的な言葉ではなく、ここではそれが実は同一のものとして表現されているのである。すなわち李徴が自尊心の面においてもやはり才能の不足に対する不安を抱いているがゆえに、臆病で消極的な態度となるのであろう。しかも、自己に詩才のないことを他人の前に露見することをおそれ、遂に羞恥心を飼いふとらせる。また、袁慆との出会いを通して、李徴が自分と袁慆の比較をきかっけに、この「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」が虎になる原因として自ら意識しているのであろう。さらに、この「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」に対して後悔しているのである。

続いて、李徴が次のように語り続けている。

己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろとところで、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って咆えた。誰かにこの苦しみが分って貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分ってくれる者はない。ちやうど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

この部分に、注意が必要なのは「僅かばかりの才能を空費して了った」、「どうすればいいのだ。己の空費された過去は？」という言葉の「空費」である。李徴は「才能」を空しく費してしまったと嘆いている。また、その「才能」を育てるためにかかった時間も無駄になってしまった。つまり、李徴がこの才能や時間を失ったことを覚悟したのである。さらに、木村一信氏は次のように述べている。

「詩家としての名」をあげることには李徴の存在はかけられていたのである。が、その「願望」もすでに滅びたといってもよい時、李徴は「フハフハした訳の分からないものに成り果て」『悟浄出世』という自分を発見する。まさに獣に化そうとする自己の姿であった。前述したように、第一の変身の原因について語った場面から、人間存在への深い懷疑に根ざした「滅び」への恐怖を見てとったのであるが、かくしてこの場面においても同様の恐れが認められるのである。しかも、ここでは「人間」として、

詩人としての可能性をも失ってしまった、とりかえしのつかないことをさえ確認している。従って、恐れというより、自分の至った境遇に対する悲哀の感情と言った方がよい。<sup>注+</sup>

李徴は官吏としても、詩人としても中途半端で社会活動の中でみずからの性格に破れていく。そのため、「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」を「飼いふとらせる」李徴は遂に虎になってしまつて、自己懷疑、さらに木村氏の指摘の通り、「人間存在への懷疑に恐怖」を感じていたのであろう。そして、李徴が山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼つて、自分の境遇に対しての怒りと悲しさを表れている。

以上、「山月記」と「人虎伝」の李徴が虎になった理由を告白する場面によつて、「人虎伝」は要するに虎になった男の怪異譚であるが、「山月記」には詩人の悲しみや作者自身の感情が貫かれている。中島敦は自分の思いや極限状況における人間の悲劇のある素材を借りて見事に文学化して「山月記」を創作した。さらに、この部分について、中島敦は虎になった李徴の「誰かにこの苦しみが分つて貰えないか」という孤独と虎の外観に人間の心を持つ悲しさとを読者に伝えているのである。

## 第二節 家族の問題と別れ

続いて、「山月記」と「人虎伝」の李徴が哀慘に妻子のことを託す場面を比較したい。それぞれの原文は次のようになっている。

漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。

最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ號略にいる。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩倖、これに過ぎたるは莫い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いたい旨を答えた。李徴の声はしかし忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言った。

本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、己が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているような

男だから、こんな獣に身を墮すのだ。

「山月記」

慘曰く、平昔の故人なり、安んぞ不可なるあらんや。恨むらくは未だ知何如事なるかを知らず、願くは盡く之を教へよと。虎曰く君我に許さずんば我れ何ぞ敢て言はん、君既に我に許せり、豈隠すあらんや、初め我れ逆旅の中に於て疾の為に發狂し、既に荒山に入る。而して僕者我が乗馬衣囊を驅り悉く逃げ去る。吾が妻孥尚ほ虢略に在り。豈我が化して異類となれるを知らんや。君南より回らば為に書を齎して吾が妻孥尚ほひ、ただ云へ、我れ已に死せりと。今日の事を言ふなかれ。之を志せと。乃ち曰く、吾れ人世に於て且つ資業なし。子あるも尚ほ稚し。固より自ら謀り難し。君の位周行に列り、素より風義を乗る。昔日の分、豈他人能く右らんや。必ず望む、其孤弱を念ひ、時に之を賑卹し、道途に殍死せしむるなくんば、亦恩の大なるものなりと。言ひ已りて又悲泣す。慘も亦泣いて曰く、慘と足下と休戚同じ。然らば則ち足下の子なり。當に力めて厚命に副ふべし。又何ぞ其の至らざるを虞れんやと。

「人虎伝」

この後に、「山月記」では「人虎伝」にはない次のような情景描写が挿入されている。

漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝って、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。

この情景描写によって、「山月記」は原典よりもずっと小説としての世界を作り上げているのである。

続いて、「山月記」では、李徴が袁倅に妻子のことを託す場面は次のようになっている。

最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声があった。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ虢略にいる。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から帰ったら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願いだが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らって戴けるならば、自分にとつて、恩倅、これに過ぎたるは莫い。

言終って、叢中から慟哭の音が聞えた。袁もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いたい旨を答えた。

一方、「人虎伝」では妻子のことにあたる部分は次のようになっている。

惨曰く、平昔の故人なり、安んぞ不可なるあらんや。恨むらくは未だ知何如事なるかを知らず、願くは盡く之を教へよと。虎曰く君我に許さずんば我れ何ぞ敢て言はん、君既に我に許せり、豈隠すあらんや、初め我れ逆旅の中に於て疾の為に發狂し、既に荒山に入る。而して僕者我が乗馬衣囊を驅り悉く逃げ去る。吾が妻孥尚ほ號略に在り。豈我が化して異類となれるを知らんや。君南より回らば為に書を齎して吾が妻孥尚ほひ、ただ云へ、我れ已に死せりと。今日の事を言ふなかれ。之を志せと。乃ち曰く、吾れ人世に於て且つ資業なし。子あるも尚ほ稚し。固より自ら謀り難し。君の位周行に列り、素より風義を乗る。昔日の分、豈他人能く右らんや。必ず望む、其孤弱を念ひ、時に之を賑卹し、道途に殍死せしむるなくんば、亦恩の大なるものなりと。言ひ已りて又悲泣す。惨も亦泣いて曰く、惨と足下と休戚同じ。然らば則ち足下の子なり。當に力めて厚命に副ふべし。又何ぞ其の至らざるを慮れんやと。

両方を比べてみると、表現が多少違っているが、伝えている内容はほぼ同じである。ここで、李徴が虎になっても、妻子のことを忘れず、袁惨に託すことからみると、李徴が完全に虎にはならず、心の中には道德観と人間性がまた残っているであろう。しかし、「人虎伝」にあつては、先に「妻子のこと」を託して、それに続けて李徴が「詩」に言及し、その伝録を袁惨に依頼している。一方、「山月記」にあつてはその順序が逆になっている。順序が変わることによって、李徴の詩への執着心をより強く読者に伝えるのである。しかし、そのことは、逆に言えば、妻子のことを想う人間的な感情が希薄であったことを物語っているということになる。

また、「山月記」ではその続きは次のようになっている。

李徴の声はしかし忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言った。

本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、己が人間だったなら。

飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を随すのだ。

「山月記」の李徴は「妻子のこと」より「己の詩業」を優先させた。そうして、その後、李徴の「飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているよ

うな男だから、こんな獣に身を墮すのだ。」という自嘲が導き出されたのであって、そこに作者の重大な思い入れがあったのではないだろうか。ここで、中島敦は虎になった李徴に人間性が残ってはいるが、それがどんどんなくなってしまうことを強調しながら、李徴の詩への執着の深さも表れていると考えられる。

以上、「山月記」と「人虎伝」の李徴が袁俊に妻子のことを託す場面によって、中島敦は道徳観と人間性がまた残っている李徴を造型したが、そこには李徴の詩への執着の深さが表れているのである。

続いて、「山月記」と「人虎伝」の李徴と袁俊の別れの場面を比較しよう、それぞれの原文は次のようになっていいる。

そうして、附加えて言うことに、袁俊が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、此方を振りかえって見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為であると。

袁俊は叢に向って、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣の音が洩れた。袁俊も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返って、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

「山月記」

虎曰く、使して回るの日、幸に道を他郡に取れ、再び此途に遊ぶなかれ。吾れ今日尚ほ悟むるも一日都て酔はば即ち君此を過ぐるも、吾れ既に省せず、將に足下を齒牙の間に碎かんとす。終に士林の笑と成らん。此れ吾が切祝なり。君前み去ることと百餘歩、小山に上り下視さば盡く見えん。此に將に君をして我を見しめんとす。勇を矜らんと欲するにあらず。君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとす。即ち吾が故人を待つ薄からざるを知らんと。復た曰く君都に還り吾が友人妻子を見るも、慎んで今日の事を言ふなかれ。吾れ久しく使旆を留め王程を稽滞せんことを恐る。願くは子と訣れんと。別を敘すること甚だ久し。俊乃ち再拝して馬に上り草茅中を回視し、悲泣聞くに忍びざる所なり。俊亦大に慟き行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、則ち虎林中より躍り出でて咆哮し、巖谷皆震る。後南中より回る。乃ち他道を取り復た此に由らず。使を遣し書及び賻贈の禮を持ち徴が子に訃せしむ。月餘にして徴が子號

略より京に入り、慘に詣りて先人の柩を求む。慘已むを得ず具に其傳を疏し、遂に己が俸を以て均給す。徵が妻子飢凍を免る。慘、後、官兵部侍郎に至る。

「人虎伝」

まず、李徵と袁慘の別れの最初の場面において、「山月記」では次のようになっている。

そうして、附加えて言うことに、袁慘が嶺南からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、此方を振りかえって見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為であると。

袁慘は叢に向って、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣の声が洩れた。袁慘も幾度か叢を振返りながら、涙の中に出発した。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返って、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。

それに対して「人虎伝」のほうは次のようになっている。

虎曰く、使して回るの日、幸に道を他郡に取れ、再び此途に遊ぶなかれ。吾れ今日尚ほ悟むるも一日都て酔はば即ち君此を過ぐるも、吾れ既に省せず、將に足下を齒牙の間に碎かんとす。終に士林の笑と成らん。此れ吾が切祝なり。君前み去ることと百餘歩、小山に上り下視さば盡く見えん。此に將に君をして我を見しめんとす。勇を矜らんと欲するにあらず。君をして見て復た再び此を過ぎざらしめんとなり。即ち吾が故人を待つ薄からざるを知らんと。復た曰く君都に還り吾が友人妻子を見るも、慎んで今日の事を言ふなかれ。吾れ久しく使旆を留め王程を稽滞せんことを恐る。願くは子と訣れんと。別を敘すること甚だ久し。慘乃ち再拝して馬に上り草茅中を回視し、悲泣聞くに忍びざる所なり。慘亦大に慟き行くこと数里、嶺に登りて之を看れば、則ち虎林中より躍り出でて咆哮し、巖谷皆震る。

両方をくらべてみると、表現が多少違っているが、伝えている意味はほぼ同じと認めてもよいだろう。

ところが、最後の部分は、「山月記」では「虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。」とし、「人虎伝」では「後南中より回る。乃ち他道を取り復た此に由らず。使を遣し書及び賻贈の禮を持ち徴が子に訃せしむ。月餘にして徴が子號略より京に入り、慘に詣りて先人の柩を求む。慘已むを得ず具に其傳を疏し、遂に己が俸を以て均給す。徴が妻子飢凍を免る。慘、後、官兵部侍郎に至る。」としている。中島敦は「人虎伝」の最後の部分を削除している。これについて新井通郎氏は次のように述べている。

「袁慘との別れ」において、李徴は自己への気付きの完結を迎え、今までの李徴ではあり得なかった他者への配慮を見せ、自己の恥部を見せることを厭わない者へと変化させている。李徴は「発狂」という形から、自己への気付きという自己回顧を<sup>注十一</sup>実現させたのである。

確かに、中島敦はここで「人虎伝」のような人情話を書く意図がなかった。中島敦は月に向かって吼えた虎の姿で虎になった李徴の悲しさを読者に伝えているのである。また、『山月記』の作者中島敦は最後の部分を物語の枠組みから排除することで、精神の「病理」故に虎に変身しなければならなかった悲劇的詩人の姿を友人袁慘との劇的な再会から別れの緊迫した数時間の中で描き出そうとしたからであった。

以上、「山月記」と「人虎伝」の李徴と袁慘の別れの場面の比較によって、中島敦は虎になった李徴の悲しさを読者に伝えている。

「山月記」とその原典である「人虎伝」の比較によって、「山月記」は「人虎伝」を基づいて、中島敦の自分なりの創作を書き加えて、詩作に執着する李徴を造型し、李徴の詩人としても官吏としてももの挫折感、この避けえない宿命に不安と孤独感、それぞれの苦しみを感じている悲しみを読者に感じさせているのである。

「山月記」の魅力は中島敦が見事に自分自身を李徴と袁慘に投影しているのである。病気に苦しんでいる中島敦が李徴に託して、自分自身が文学に執着することを示しながら、一方、袁慘にも投影し、自分自身の才能があるかどうかという自己懷疑、自己批判もしているのである。

「山月記」を読み終わって、人生のそれぞれの苦しみを苦しみながら生きなければならぬ人間の悲しさを読者の心に残っているのだろう。「山月記」を通して、痛烈な作家的な生きかたを見られ、作者中島敦の姿も生々しく見られるのである。

注一 佐々木充 『中島敦の文学』 昭和五十一年六月 桜楓社

注二 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版第二卷 小学館株式会社 二〇〇〇

- 〇年一二月
- 注三 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版第八卷 小学館株式会社 二〇〇〇年一二月
- 注四 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版第六卷 小学館株式会社 二〇〇〇年一二月
- 注五 北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版第六卷 小学館株式会社 二〇〇〇年一二月
- 注六 佐々木充 『中島敦』 昭和五十年五月 桜楓社
- 注七 木村東吉 「山月記」成立期考」 国文学攷(八十二) 広島大学国語国文学会 一九七九年六月
- 注八 高田瑞穂 「山月記(三)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第四号 学燈社 一九六〇年二月
- 注九 山本周子 「中島敦「山月記」考」 二松学舎大学人文論叢(二十九) 二松学舎大学人文学会 一九八四年
- 注十 木村一信 『山月記』論——〈滅び〉への恐れ—— 『中島敦論』 双文社 昭和六十一年二月二十二日
- 注十一 新井通郎 「中島敦「山月記」の世界」 二松大学院紀要二十二 二〇〇八 二松学舎大学

結び

「山月記」とその原典である「人虎伝」を表現に則して比較して、第一章のそれぞれ冒頭部分の比較から見ると、「山月記」はほぼ「人虎伝」を踏襲したものであるが、中島敦は自分の創作を文中に書き加えて、詩作に耽った李徴を造型し、また、作者として名を成すことを望んでいた中島敦は自身の姿を李徴に投影したと考えられる。また、官吏としても、詩人としても挫折を経験した李徴が自尊心が傷つくことを詳しく書き加えていることで、読者が李徴が遂に発狂に至ったことを容易に受け入れる素地としたのである。

また、それぞれ李徴と袁惨の出会いの場面についての描写から比べると、「山月記」はほぼ「人虎伝」を踏襲したものであるが、中島敦は自分の創作を文中に書き加えることで、李徴の袁惨に対しての卑屈感、袁惨に会いたいが、自分の姿を見せたくない矛盾した気持ち、化け物である李徴の羞恥心を読者に生々しく感じさせるのであろう。

「山月記」の李徴は「詩家としての名を死後百年に遺そう」という執念には中島敦本人も共感を持つだろう。「山月記」は中島敦が三十三歳の時に発表された作品である。しかも、「山月記」は中島敦のデビュー作である。つまり、中島敦は「山月記」を創作する時、まだ小説家として認められていなかった。当時、中島敦は病気に苦しんでいた。その時の中島敦自身も自分が死んでも小説家として認められたいという気持ちは想像に難くないであろう。また、中島敦のもう一篇の作品『光と風と夢』の主人公ステイヴンスンに託して洩らした次の言葉にも通じる心情である。「人生とは、私にとって、文学でしかなくなった。文学を創ること。それは、飲むでもなく苦しみでもなく、それは、それとより言いようのないものである。」物語に詩人という存在を設定する必然性には、中島の願望ともいえるべき決意があった。その決意があるゆえに、中島敦は詩作に耽った李徴を造型し、二つの挫折を経験させ、自身の姿を李徴に投影したと考えられる。

第二章は「山月記」と「人虎伝」の李徴が虎に変身する経過を告白する場面によって、「山月記」では李徴がこの避けえない宿命の中で、不安や孤独を感じて、自分が人間の心を失うことに恐怖していることを示しているのである。

また、それぞれの李徴が袁惨に詩を託す場面についての描写から比べると、中島敦は自身の感情を李徴に投影し、李徴が詩人になりたかったがなれなかった気持ちを読者に伝え、李徴の不幸を読者に共感させるのである。

中島敦は虎になった李徴が家族のことより先に詩を託すことによって、詩に執着する李徴を造型した。しかし、詩に執着した李徴の詩は欠けるところがあつて、李徴の詩人になりたかったがなれない気持ちや、虎になった避けえない宿命の中での不安や孤独を読者に感じさせている。そして、ついにここに、不安や孤独の詩人李徴像が造型されるにいたっ

たのである。

第三章は「山月記」と「人虎伝」の李徴がそれぞれ虎になった理由を告白する場面によって、「人虎伝」では要するに虎になった男の怪異譚にすぎなかったものが、「山月記」では詩人の悲しみや作者自身の感情が貫かれるものとなっている。中島敦は自分の思いや極限状況における人間の悲劇を、ある素材を借りて見事に文学化して「山月記」を創作した。さらに、この部分について、中島敦は虎になった李徴の「誰かにこの苦しみが分って貰えないか」という孤独と虎の外観に人間の心を持つ悲しさを読者に伝えているのである。

また、「山月記」と「人虎伝」の李徴が袁慆に妻子のことを託す場面によって、中島敦は道徳感と人間性がまた残っている李徴を造型したが、そこには李徴の詩への執着の深さが表れているのである。

最後の袁慆との別れの場面で、中島敦は月に向かって吼えた虎の姿で、まさしく虎になった李徴の悲しさを読者に伝えているのである。

以上、「山月記」と「人虎伝」の比較を通して、「山月記」の魅力は中島敦が見事に自身を李徴と袁慆に投影して、詩人李徴の不安、孤独を感じさせ、避けえない宿命での悲しさを造型し、そのことによって読者に大きな共感を与えたのである。

なお、今後も折にふれ、「山月記」を研究し続けたいと考えている。

参考文献目録

《テキスト》

釘木久春／中島たか／中村光夫／氷上英廣 『中島敦全集 第一巻』 筑摩書房 昭和二十四年十一月二十五日再版発行

国民文庫刊行会 『国訳漢文大成』文学部第十二「晋唐小説」東洋文化協会 昭三十年八月複版発行

《参考文献》

福永武彦 『近代文学鑑賞講座 第十八巻 中島敦 梶井基次郎』 角川書店 昭和四十四年三月一日

佐々木充 『中島敦——近代文学資料——』 桜楓社 昭和五十年五月五日

佐々木充 『中島敦の文学 近代の文学・十巻』 桜楓社 昭和五十一年六月二十日

鷺只雄 『中島敦 ^ 叢書 現代作家の世界5』 文泉堂 昭和五十二年四月一日

中村光夫 氷上英廣 郡司勝義 『中島敦研究』 筑摩書房 昭和五十三年十二月二十五日

濱川勝彦 『中島敦の作品研究』 明治書院 昭和五十六年十一月十日

木村一信 『中島敦論』 双文社 昭和六十一年二月二十二日

奥野政元 『中島敦論考』 桜楓社 昭和六十年四月二十五日

鷺只雄 『中島敦論——「狼疾」の方法』 有精堂 一九九〇年五月二十五日

勝又浩／木村一信 『昭和作家のクロノトポス 中島敦』 双文社 一九九二年十一月十日

藤村猛 『中島敦研究』 溪水社 平成十年十二月二十日

勝又浩／山内洋 『中島敦「山月記」作品論集 近代文学作品論集十』 クレス出版 二〇〇一年十月二十五日

村山吉広 『評伝・中島敦——家学からの視点』 中央公論新社 二〇〇二年九月二五日

平林文雄 『中島敦 注釈 鑑賞 研究』 和泉書院 二〇〇三年三月二〇日

勝又浩 『中島敦の遍歴』 筑摩書房 二〇〇四年一〇月二〇日

渡邊一民 『中島敦論』 みすず書房 二〇〇五年三月二十三日

佐野幹 『「山月記」はなぜ国民教材となったのか』 大修館書店 二〇一三年八月

《雑誌掲載論文》

- 高田瑞穂 「山月記(一)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第一号 学灯社 一九五九年一月
- 高田瑞穂 「山月記(二)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第三号 学灯社 一九六〇年一月
- 高田瑞穂 「山月記(三)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第四号 学灯社 一九六〇年二月
- 高田瑞穂 「山月記(四)」 国文学 解釈と教材の研究 第五卷第五号 学灯社 一九六〇年三月
- 山本慶子 「中島敦小論——山月記を中心として」 女子大國文(三十三) 京都女子大 国文学会 一九六四年五月
- 榎林滉二 「中島敦の世界」 近代文学試論第八号 広島大学文学部国文研究近代文学研究会 昭和四十五年八月
- 岩田一男 「山月記」 雑談 言語文化(七) 一橋大学 一九七四年五月
- 上尾龍介 「人虎傳と山月記」 中国文学論集四 九州大学中国文学会 一九七四年五月
- 越智良二 「中島敦論のこころみ(一)——ひとつの心象風景を廻って——」 近代文学試論第十三号 広島大学近代文学研究会 昭和四十九年十月
- 越智良二 「中島敦論のこころみ(二)——表現者の系譜を廻って——」 近代文学試論第十五号 広島大学近代文学研究会 昭和五十一年十一月
- 木村東吉 「山月記」 成立期考 国文学攷(八十二) 広島大学国語国文学会 一九七九年六月
- 村上隆彦 「李徴について——中島敦「山月記」書付け」 親和国文(十五) 親和女子大学国語国文学会 一九八〇年十二月
- 片岡純子 「中島敦「山月記」について」 駒沢短大國文(一一) 駒澤大学 一九八一年三月
- 山本周子 「中島敦「山月記」考」 二松学舎大学人文論叢(二十九) 二松学舎大学人文学会 一九八四年
- 奥野政元 『山月記』ノート 活水日文二二一 活水女子大学 一九九一年三月
- 佐々木充 「羅生門」から「山月記」へ 千葉大学教育学部研究紀要 第一部 千葉大学 一九九二年二月
- 高橋龍夫 「山月記の世界…読みの可能性を広げるために」 人文科教育研究(二十二) 筑波大学 一九九五年八月
- 神谷正彦 「山月記」おぼえ書 弓削商船高等専門学校紀要(十八) 弓削商船高等専

- 門学校 一九九六年二月
- 河内信宏 「中島敦「人と作品」」 城西大学研究年報人文・社会科学編(二十 城西大学) 一九九六年三月
- 西原千博 『山月記』試解…虎の魅力」 語学文学(三十六) 北海道教育大学 一九九八年三月
- 田中俊弥 「文学教材「山月記」に関する授業研究ノート(七)」 学大国文(四十三) 大阪芸芸大学国語国文学研究室 二〇〇〇年二月
- 中村良衛 「李徴とは誰か——『山月記』私論——」 日本文学第四十九卷 日本文学協会 二〇〇〇年二月
- 柳沢浩哉 森田真吾 『山月記』の修辭的分析…「臆病な自尊心と尊大な羞恥心」の修辭とその狙い」 人文科教育研究(二十七) 筑波大学 二〇〇〇年八月
- 吉村久夫 「中島敦「山月記」論…「欠ける所」についての考察」 兵庫教育大学近代文学雑誌(十三) 兵庫教育大学 二〇〇二年二月
- 三浦吉明 「山月記」の季節について」 神奈川大学人文学会誌(二四七) 神奈川大学 二〇〇二年
- 梶田隆之 「山月記」論考」 津山工業高等専門学校紀要(四十四) 津山工業高等専門学校 二〇〇三年一月
- 柳沢浩哉 『山月記』の五つの謎——撞着語法と対照法の畧」 国文学攷(一九七) 広島大学国語国文学会 二〇〇三年九月
- 閻瑜 『山月記』の「欠ける所」から見る中島敦文学の変貌…「狼疾」から「述而不作」へ」 大妻女子大学大学院文学研究科論集(十四) 大妻女子大学 二〇〇四年三月
- 片山一良 吉原英夫 「教材『山月記』論…詩の伝録を依頼する李徴の指導を通して」 北海道教育大学紀要・教育科学編(五十五) 北海道教育大学 二〇〇四年九月
- 松井茜 「中島敦「山月記」について」 愛知大学国文学第四十五号 愛知大学国文学会 平成十七年十二月
- 小澤保博 「中島敦「山月記」を読む」 琉球大学教育学部紀要 琉球大学教育学部 二〇〇六年三月
- 永井博 「中島敦における〈自己〉への懐疑・概観」 四日市大学論集第二十卷第一号 四日市大学 二〇〇七年九月
- 新井通郎 「中島敦「山月記」の世界」 二松大学院紀要二十二 二松学舎大学 二〇〇八年
- 橋本正志 「中島敦の漢詩——〈家学〉の衰頹と〈不遇意識〉のかたち——」 論究日本

文学第九十一号 立命館大学日本文学会 二〇〇九年十二月  
西谷博之 「中島敦「山月記」の比較文学の考察 緑聖文化(第八号 標宮子先生・西谷博之先生・井上伸子先生追悼号)」 緑聖文化 二〇一〇年三月  
橋本正志 「中島敦「山月記」論…唐代伝奇「人虎伝」と作品の人物・舞台設定を視座として」 論究日本文学(九十六) 立命館大学 二〇一二年五月  
天満尚仁 「虚数としての李徴…中島敦「山月記」論」 立教大学日本文学(一〇八)  
立教大学 二〇一二年七月

《辞書・事典》

久松潜一／吉田精一 『近代日本文学辞典』 東京堂 昭和二十九年五月  
諸橋轍次 『大漢和辞典』縮写版 大修館書店 昭和四十九年九月  
北原保雄／久保田淳 『日本国語大辞典』第二版 小学館株式会社 二〇〇〇年十二月